

白夜を旅する人々



白夜を旅する人々

三浦哲郎



新潮社版

昭和五九年一〇月二五日 発行
昭和六一年一月二五日 二〇刷

定価 一八〇〇円

びやくや
白夜を旅する人々
ひとびと

© Tetsuo Miura,
Printed in Japan, 1984.

著者 三浦哲郎 (みうら・てつお)

発行者 佐藤亮一

印刷 株式会社光邦
製本 加藤製本株式会社

発行所

株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七二番地 (郵便番号 一六二)
電話 (編集部) 〇三―二六六―五四一―
(業務部) 〇三―二六六―五一―
振替 東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料は小社負担にてお取替えいたします。

白夜を旅する人々

馬櫓が走り始めると、空罐に風穴をあけただけの手焙り火鉢から、火の粉が音を立てて舞い上った。赤犬が馭者の野太い声に驚いて吠えた。

狭い谷間に馬の鈴の音が響いて、それで見送りの老婆たちの声が、どれも鈴を振りながら唱える御詠歌のひとつしにきこえた。助産婦が、走る馬櫓から手を振った。

「それじゃ、お大事に。なるべく精のつくものを食べさせるのよ。それから、赤ちゃんに風邪をひかせないようにね。」

雪明りのなかで腰を屈めている老婆たちはみるみる野仏のようにちいさくなって、助産婦の言葉尻が咎を招んだ。

道は、じきに裸の雑木林に入って、ゆるい下り坂になる。清吾は、谷風に煽られる火の粉を避けてのけぞりながら、助産婦が深い吐息を半分声にして洩らすのを聞いた。

「お疲れでやんしょう。」

「ええ、すこし。朝から産婦と一緒に力みつ放しでしたから。」

と助産婦は笑って、

「あなたも待ちくたびれたでしょう。どのぐらいお待ちになった？」

「なに、おらは二時間ばかり……。」

「そういえば、時間のことなんかすっかり忘れていたわ。もう何時になるかしら。」

内ポケットから、父親が貸してくれた懐中時計を取り出して、炭火の方へ傾けると、それにも火の粉が降りかかった。八時をすこし過ぎていた。

「あなた」と助産婦がいった。「こつちへいらつしやれば？　そこは火の粉がうるさいでしょう。」

「なんも。おらはここで平気でやんす。」

「そう言わずに、ここへいらつしやいな。こんなお婆ちゃんと並ぶのは、お厭？」

「いえ、そんな……。」

折角だから、低い杵板に掴まって立ち上ると、ひさしぶりに羽織ってきた中学時代のマントが風にひるがえった。助産婦が隣に空けてくれた席へ移って、馭者と背中合わせに腰を下ろすと、強い消毒薬の匂いがした。

「大層な難産だったそうぞ。」

「そりゃあ、もう……。取り上げ婆さんたちがそうしちゃったのね。だって、使いがきて駈けつけてみたら、逆子も逆子、右足だけが先ににゅつと出てるんですもの。その足も、くるぶしのあたりが締めつけられて、指の方まで紫色にふくれてるの。あんなの、初めて。いつだって、にっちもさっちもいかなくなつてから招びにくるんだから……。」

助産婦は急に口を噤むと、ちいさな囁をつづけさまに二つした。それで清吾は思い出して、ネルに包んで用意しておいた湯タンポを、どうぞと助産婦の膝の上に置いた。

「まあ、よく気がつくこと。これも母さんのお指図？」

「はい。さっきの家で産湯をすこし分けて貰いました。」

「道理でこんなに暖かいもの。こんな指図をなさるようなら、まだまだ時間がかかるわ、母さんは。あなたの母さんはね、目が霞んできて、障子の棧が見えなくなるまでは産まないお人なの。初産のときから、そう、あなたを産むときからそうだったんだから。あなたの次に、妹さんが生まれて、それから……。」

「弟、妹、妹でやんす。」

「今度で六人目でしよう。もう五人も産んだんだから、自分のお産のことはよく御存じよ。きつと私がつくまで待つていてくださるわ。」

「でも、下の妹を産んでから、もう十年にもなるんでやんすが……。」

「十年ぶりでも、大丈夫。女の軀はね、齡をとると様子が変わるけど、軀の質たちというものはいつまでも変らないもんなの。」

助産婦はそういつてから、馭者に、ちょっとした間だけゆっくり走ってくれないだろうかと頼んだ。

「足袋を穿く間だけ。近頃は齡のせいか足袋の穿き方が下手になつてね。揺れているところだと、こはぜがうまくはまらないのよ。」

「お安い御用と、馭者は手綱を引き締めてから、

「若旦那。」と清吾を振り向いていった。「提灯を点けてあげたら、どんだけす？」

「いいの。それには及びませんよ。」と助産婦がいった。「手探りは馴れてるから。在ざいの産所ざいつて暗い

んですから。今日だって納屋で取り上げてきたの。」

清吾は気がつかなかつたが、助産婦は素足に雪下駄を履いて櫓に乗ってきたのであつた。

「私はね、足の指先から風邪をひく癖があるのよ、若いころから。」と助産婦は、いつもぴんとふくらませている黒革の手提鞆を膝の上で手探りしながら、おかしそうにいった。「そんな軀の癖って直らないもんでね、この齡になつても足袋を脱ぐと待つてたように嚏が出るのよ。」

清吾は、さっきの農家の土間で見た助産婦の白い割烹着がすっかり血にまみれていたのを思い出して、いつの間にか素足になつていた訳がわかるような気がした。すると、ついでに、助産婦が手を洗つていた流し場の前の破れ障子が、風に吹かれて手風琴のように鳴つていたのも思い出されて、清吾は身じろぎをしながらマントの襟に首をすくめた。

「お産婆さん。」

と馭者がいった。馬轡はもうほとんど停まつていた。

「さっきの難産の話だとも、そつたら逆子がよくもまあ無事に生まれたもんだねし。」

「ほんにねえ。」と、助産婦は足袋を穿きながら他人事のようにいった。「取り上げた私でさえも不思議な気がするわ。」

「どつたら術をば使いなすつたのし？」

「術なんて、あるのですか、あなた。ただ赤ちゃんの足を掴んで引っこ抜いただけ。」

おいたあ、と馭者は驚きの声を上げた。

「だって、産む方も生まれる方も、死ぬか生きるかの瀬戸際ですもの。どっちを助けるにしたつて、ともかく赤ちゃんを外へ引き出さなくっちゃ。」

「それにしたつて、お産婆さん。」と馭者がいった。「人は二本足だえし、畠の大根引っこ抜くような

わけにはいきやんすめえに。」

「そう言えば、取り上げ婆さんたちも話してたわ、大根でも二股のは抜くのに難儀せつちよするもんだって。でも、そんなこと言つて腕組みしても仕様がなから、こつちは辛抱強く、もう一方の足を探してね、一緒に引つこ抜いたの。」

「……どこをば探しなすつたんで？」

「どこつて、腹のなかをですよ。よそを探したつてないんだから。」

はあ、といったきり、馭者は黙った。

助産婦は足袋を穿き終えて、有難うと馭者にいったが、櫓がまだ動き出さないうちに、馬の腹の下で放尿の音が起こつた。三人は、しばらく無言で、春先の弛んだ雪道を掘るようなその音を聞いていた。

「……赤子は、そつくり出てきやんしたか。」

音が止むとすぐ、馭者がいった。

「ええ、そつくり。」

「どこも挽もげねで。」

「どこも挽もげないで。ただ、最初はぐつたりして泣きもしないから、やつぱりいけなかつたかと思つたけど、逆さに吊してお尻をびしゃびしゃ叩いてるうちに、やつとちいさな声で、ひい、と泣いたの。あのひいは、まるで神様のお声ね。死んだようになっていた母親も息を吹き返すし、こつちだつて生き返つたような心地がするし。」

「……なんにしても、大てした腕で。」

と、馬の尻に手綱を鳴らしながら馭者がいった。

「そうじゃないのよ。私も自分にできるだけのことはするけど、私の及ばないところをいつも誰かが助けてくれる。難産の子を取り上げるたびに、自分一人の力じゃとてもこんなことはできない、目に見えないなかで大きな手を貸してくれたんだって、そう思うの。」

「そいつ、耶蘇ヤソの神さんのこつてやんすか？」

と、馭者は薄気味悪そうにいった。

「さあね。私はそうだと思いたいんだけど。とにかく、私たちのような人間じゃないものね。」

不意に、馭者は野太い声を張り上げて馬を叱咤した。轡は速力を増して揺れ出した。助産婦は、さつきから黙りこくっている清吾の膝を軽く叩いた。

「なにも心配することはありませんよ。」

「はい……。」

「私はちよつと、こつくりしますよ。今夜も遅くなりそうだから。」

そういつて、角巻かくまきの襟のうしろを頭の上まで引き上げると、助産婦は深くうつむいて枳板にもたれた。馭者も、助産婦が連れてきたかもしれない耶蘇から身を守ろうとするかのように、防寒帽の耳当てを深く下ろして固く口を噤んでいる。あたりは、鈴の音と、りゅい、りゅい、と轡の下で雪の軋む音だけになった。

清吾は、手焙り火鉢を助産婦の方へ押してやると、自分も膝小僧を抱いて反対側の枳板にもたれた。次第に広くなってくる谷間の空を仰いでいると、そこにひしめいている星屑の一つがすいと流れて、そのまま光るサーベルのような尾を引きながら思わず首をすくめなくなるような流れ星になった。

清吾の胸に、そのとき強い祈りの衝動が湧いた。祈らなければ。早く、あの星が消えないうちに祈らなければ。そう思ったが、祈りがやつと言葉になったのは、流れ星が燃え尽きてしばらくしてから

であつた。べつに、長つたらしい祈りでもないのに、なんたる愚図か。十九にもなつて、いきなり童の遊びをしようとするからだ。そう思つて清吾は自分を喰ひたくなつた。

童の真似はそれきりやめたが、ほんの一言の祈りの文句は消えずに残つて、清吾はそれを持て余した。その厄介な文句というのは、こうであつた。

（どうぞ、みんなとおなじ肌色の子を。白い子はもうたくさんです）

二

（おなじ女の乳房でも、右と左とは大きさが違う。固さも違う——そんなことつて、あるものだらうか）

章次は、紺緋の袷に綿入れ半纏を重ね着して、机に頬杖を突いていた。さつきまで代数の問題を解いていた帳面の余白には、およそ場違いな「乳」という漢字がぼつと一つ書いてあり、そのまわりをぐるぐると幾重もの渦巻で囲んである。

章次は、中学生にはあるまじきことを考えていた。

——自分は、女の乳房といえれば自分の母親のものしか知らない。乳を飲んだ記憶はもうないが、子供のころは風呂場で見馴れていたし、いまでも時々、夜遅く台所の流し場で見ることがある。母は、髪を洗うとき、冬のさなかでも諸肌を脱ぐが、洗いながらそばの湯釜の沸き加減を見ようとしてちよつと肘を持ち上げるたびに、もうそろそろ四十になるのに自分が馴染んでいたころとあまり変らないような乳房を見せる。

母の乳房は、差し乳といって、とても出のいい乳だという。妹たちがまだちいさかったころ、母が自分でそう自慢するのを何度か聞いたことがある。小振りだが、ぴんとふくらんで、弾力の豊かな乳房であった。それに手を触れた記憶もいまは遠いものになってしまったが、自分の母親の乳房に関する限りは、大きさといい固さといい、右も左も似たようなものだったと憶えている。

誰もが母のような差し乳ではないかもしれないが、目や耳とおなじように、まず大概の女の胸には大きさも固さもほとんどおなじくらいに乳房が二つ並んでいると思つて差し支えないのではなからうか。そうだとすれば、やはり高林のいうように、咲子の乳房は病んでいるのだと思うほかはない。

いま学校はちようにど試験期間で、今日は英語の試験日だったが、高林はよほど出来がよかったと見えて、帰りはいつになく饒舌であった。のべつ幕なしに喋りつづけて、しまいには歩きながら耳に口を寄せてきて咲子の乳房のことを囁いた。咲子の乳房の片方が異様にちいさくて固いのだといった。てつきり、ふざけついでの冗談かと思つたが、意外にも高林は真顔であつた。

咲子というのが、おなじ小学校を一緒に出て、いまは女学生になっている商人宿の娘のことだとすぐわかつたが、親戚でもないのにどうしてそんなことまで知つてゐるのかと尋ねると、それはおまえの想像に任せると高林はいつた。このときばかりは、さすがに口を歪めるようにして笑つて見せたが、すぐにまた元の真顔に戻ると、咲子の乳房は病んでいるのだ、それを俺は俺自身の手で治してやりたい、俺は決心した、俺は将来医者になる、咲子の病んでいる乳房のために俺は医者になるのだと、高林は急ぎ込んで吃りながらそういつた。耳たぶに息が熱かつた。正直いつて、衝撃を受けた。

まさかあの、いつも取り澄ましている器量よしが乳房を病んでいるとは思わなかつた。それが本当なら、気の毒なことであつた。また、高林が咲子の乳房を知つてゐるらしいことも、意外ではあつたが、それが事実にしても大人ぶるための法螺話にしても、なにもいわずに背中を一つどやしつけてや

れば済むことであつた。どちらにしても衝撃を受けるほどのことではなかつた。

けれども、高林は、咲子の乳房のために医者になるのだといつた。その言葉が、衝撃であつた。たとえそれが一つの願望にすぎないにせよ、高林は他人のために生きようとしてゐる。これまで、自分の人生は自分だけのものだと思つていたが、どうやら人は時として自分以外の誰かのために生きねばならぬこともあるらしい。高林の言葉はそのことを教えてくれると同時に、自分もいずれは自分以外の誰かのために生涯を送ることになるのではないかという、遠い予感のようなものを与えてくれた。

その予感のようなものを手繰り寄せてみると、やはり自分も結局は医者になるほかはないような気がする。勿論、乳房を病んでいる小娘のためにではなく、あまりにも白く生まれついた自分の姉と妹のために。

五人の兄弟姉妹のうち、三人が女で、姉のいると、一番下の妹のゆうとは、あまりにも白い。白すぎる。肌ばかりではなく、髪も、眉毛も、睫毛も、産毛も白い。二人の軀で色のあるのは、空色がかつた灰色の目と、そのまんなかにある紅い瞳と、血の色が淡く透けて見える唇だけだ。

髪は染粉で染めている。眉は毎朝まゆみで描く。けれども、睫毛の白さと弱視だけは、どうすることもできない。それで外へ出るときは薄墨色の眼鏡をかけるが、それでも光ばかりではなく人の目も眩しすぎて、二人は道端の方へ顔をそむけて、寄り添つて歩く。

二人に色と視力と呼び戻す術はないものだろうか。町の子供らは二人のことを白っ子といつてからかうが、学校の図書室で調べてみると、正しくは先天性色素欠乏症と呼ぶらしい。先天性が気になるが、症というからには病氣の一種に違いない。病氣なら治る望みがありはしないだろうか。

やはり、誰か医者が必要である。治るか治らないかは別として、二人のために生涯を送る医者が是非とも必要なのだ……。

部屋の脇の階段が軋む音で、章次は我に返った。急いで〈乳〉の字を消しゴムで擦ろうとすると、
「章ちゃん、いる？」

と、襖の外で姉のるいの声がした。

姉なら、机の上の文字など見えはしない。章次は、なぜそうするのか自分でもわからぬままに、それまでぼんやり目を落していた帳面の上を汚れでも拭うように手のひらで一と撫ぜしてから、返事をした。

るいは、襖を細目に開けると、首だけ入れて、

「お晩です。」とお道化たようにいった。「ちよつくら居候させてくれぬかな？」

章次は笑つて、入んなせ、といった。

「勉強？ こつたら晩に、よく落ち着いていられること。」

「試験だもんし、明日も。」

章次は、ただそういっただけで火鉢の炭火を掘り起こした。るいは、自分の座布団を二つ折りにして持つてきていた。それを火鉢のそばにひろげて置くと、なから分厚い小型本が出てきた。辞書かと思つたら、聖書であつた。

「こないだ、お産婆さんが貸してくれたの。毎日一頁ずつでもいいから読んでごらんというて。でも、片仮名がやたらに多くて、馴染めないのえ、一向に。人の名前やら土地の名前やら、どつきり出てきて、おらにはとても憶えきらんね。でも、こうして持つてただけでも気が休まるっていうから。」

るいは、聖書を両手で持つて膝の上に置くと、普段は滅多に覗くこともない部屋のなかを珍しそうに見回していたが、やがて鼻に小皺を寄せて、

「男臭せ。」

と聞いた。

章次は、なんとなくぎまぎして、夕方から助産婦を迎えに近在へ出かけている兄は戻ってきたらうかと訊いた。

「それが、まだなの。台所ではもう湯が沸いてるのに。階下ではみんな、いらいらしてる。」

「途中で馬車がどうかしたんだえか。」

「みんなの話だと、町の産婆さんを頼むくらいだから山ではよほどの難産だろうって言うんだけんど。」

「もし間に合わねかったら、どうなるんだえか。」

「母さんはな、お産婆さんが着くまでは産まねって、自分でそう言うてるんだと。」

それなら、助産婦を乗せた馬車がこのまま明日の朝まで着かなければいい。明日、自分が学校へいつている間に生まれてくれるといい。章次はふと、そう思った。

「おらの居場所はどこにもないし」と、るいはいつた。「部屋に独りしていると、心細くつて。あんたの邪魔はしねつから、しばらくここにいさせてな。」

章次は、姉が聖書をひらくのを見て、自分も机に向き直った。るいは弱視だから、本を読むときは極端に目を細くして、顔をこまかく横に振り動かす。それを見てみると、章次はいつも息が詰まってる。しばらくすると、

「章ちゃん。」

と、るいはいつた。

「なに？」

「今度の子、弟と妹と、どっちがいい？」

章次は、不意を衝かれて口籠った。正直いつて、そんなことはいちども考えたことがなかったのである。今度生まれてくる子については、最初から、口にはできない願いが一つあるきりであつた。

「……おらは、どっちでも。」

と章次はいった。

「おらも、どっちでもいい。」

るいがそういつたとき、不意にどこからか赤ん坊の泣き声がきこえてきた。二人は、顔を見合わせた。どちらの背筋も伸び切つていた。空色がかつたるいの目は、緊張のあまりいくらか斜視になつていた。

けれども、その声は忽ち二つに殖えて、纏れ合い、騒々しくトタンを鳴らして裏屋根を駈けた。

二人は、肩を落して、なにもいわずにちよつと首をすくめ合つた。

三

谷を抜けると、雪道のところどころに黒土が露出していて、そんなところへさしかかるたびに馬を励ます馭者の声が助産婦の眠りを妨げた。あたりの雪明りもめつきり薄れて、清吾は提灯に火を入れた。〈山勢〉と父親の営む呉服屋の屋号が浮かんだ。

助産婦と清吾は、途中の村の入口の橋を櫓から降りて歩いて渡ると、むこう袂の蹄鉄屋で四輪馬車に乗り換えた。そこから町までは一と息だったが、もう三月も半ばで、根雪が消えたあとに何度か降つた春先の雪も、そこから先はあらかた融けてなくなつていた。清吾が町からくるときも、そこまで